

## 第 27 回 東北大学災害科学研究拠点セミナーを開催しました

テーマ：災害放射線医学、放射線病理、内部被ばく発がんメカニズム、被災動物事業、福島第一原発事故  
 会場：オンライン  
 URL：<http://www.irdes-pudh.med.tohoku.ac.jp/>

2023 年 10 月 18 日に、第 27 回東北大学災害科学研究拠点セミナー、第 40 回「災害と健康」学際研究推進セミナー、第 7 回ヒューマンレジリエンス重点研究領域セミナーをオンラインで開催しました。講師に、福本学東北大学名誉教授、災害科学国際研究所特任教授（客員）（災害放射線医学分野）、理化学研究所客員主管研究員をお招きし、「放射線病理学：トロトラスト症内部被ばく発がんから福島第一原子力発電所事故へ」という演題でご講演いただきました。

病理医として歩みを始めた頃の福本特任教授（客員）が、病理標本の用途を遺伝子発現解析へと広げて治療病理学を目指していたこと、その理念を第二次世界大戦中に用いられた血管造影剤トロトラストによる内部被ばく肝がんの病理標本解析を通じて実践し、放射線病理学を開拓した経験が紹介されました。また、福島第一原子力発電所事故発生後すぐに、福本特任教授（客員）が中心となって原発事故に被災した動物の放射線影響を調査する被災動物事業を立ち上げ、東北大学をハブ機関としてオールジャパン体制を構築したこと、旧警戒区域に入域して被災動物から採取した試料のアーカイブ化、アーカイブ試料を用いた様々な動物種における解析結果が概説されました。

総じて被災動物は何らかの影響を受けているが、顕著な異常が見られていない、というのが現時点での結論です。過去に生じた放射線災害事例による晩発影響が出現するまでの期間を参考にすると、被ばく影響の有無を明らかにするためには被災動物の影響調査を今後も継続する必要があること、二度と取り直しが出来ない試料を切れ目なく収集し、今後の技術革新による精度の高い研究手法へ利用するための質の高い試料を適切に保管する重要性についての話がありました。被災動物事業を通じて原子力災害時の環境動物影響調査のノウハウが培われましたが、低頻度災害である原子力災害対応に平時から人材を確保することは難しく、技術の継承について話題になりました。当研究所が必要時に技術や知見を多方面に展開するコアとしての役割をはたすことへの期待が寄せられました。

千田浩一教授（災害放射線医学分野）が冒頭に挨拶をした後に本講演が始まりました。90 名近い事前参加登録と常時 50 名を超えるご参加をいただき、ユニークな研究内容と明朗な語り口調で多くの方に関心を持っていただくことができました。質疑応答では、福島第一原発事故による生物影響や内部被ばく影響に関する多くの質問が寄せられました。



被災動物事業のフィールドワークの紹介



質疑応答